

「真神の原」を詠んだ万葉歌人

2021.2. 太田蓉子

「真神まかみの原はら」は、現在「飛鳥京跡」と呼ぶ地域の中心地です。飛鳥寺を建立する時、その南方一帯の平地を称したと見られますが、今この地名は残っていません。(飛鳥京は、現在の明日香村飛鳥から明日香村岡までの地域で飛鳥川の右岸(東側)、そこを中心に造られた都。この地は「飛鳥盆地」とも呼ばれる。京は、周辺の地域をも含める場合もある。)「真神原」の地名について、「大和国風土記(逸文)」には、“老狼おおかみが居て、多くの人を食らい、土地の人が畏れて、大口の神と言ひ、その地を大口の真神原と言う”旨、記されると言われます。(「枕詞燭明抄」)

また、「日本書紀」によると、“蘇我馬子が、法興寺(飛鳥寺)を建立せんとする時、この地を飛鳥の真神原と名づけた”とあります。(32代崇峻天皇・588年)

また、寺院の造営に際し、ここに在った渡来系の人の家を壊したとあります。当時、家は疎らながら建っているが、「真神」と呼ばれた狼が、時には東の山々から下りて来るような野原であったと想像されます。

やがて、飛鳥寺は、33代推古天皇の時代に発展し、蘇我氏宗家の滅亡後(36代孝徳天皇以降)は朝廷が管理する大寺院となっていきます。

(飛鳥寺跡の発掘により、南から、南門、中門、塔、東西中の三つの金堂、中金堂に大仏、講堂なども備え、寺域は2万坪に及ぶ大寺院であったと判明。)

(但し、推古天皇の宮廷は、飛鳥寺から北西へ1 km程離れた飛鳥川の西側にあった。

「豊浦宮」(592年～603年)、「小墾田宮」(603年～628年)である。)

そしてこの地に、34代舒明天皇、35代皇極天皇、37代齐明天皇(皇極天皇の重祚)が、宮殿を造営し、ここを京(都)とします。それぞれ「飛鳥岡本宮」「飛鳥板蓋宮」「後のちの飛鳥岡本宮」と呼びました。(「乙日の変」(645年)後の9年間は、36代孝徳天皇は、

「難波長柄豊崎宮」に移る。)

この間に、官衙、迎賓館、漏刻塔(水時計)や集会広場、宮廷苑池、祭祀施設、そして建設資材や装飾品の加工工房など、数多くの施設が造られ、周辺には貴族や官人の屋敷、新たに寺院も建てられました。(その後、天武天皇が「飛鳥浄御原宮」を造営。後述)

「真神の原」は一変し、当時、最早この地名は使われなくなったと思われま

さて、

万葉集には「真神の原」を詠んだ歌が3首あります。

歌は、当然、飛鳥京の発展以前のこの地を、懐かしんで詠んだものかと思われま

ところが、歴史的に伝わる「真神の原」と、歌が語る「真神の原」との間に、齟齬そごが見られるのです。

そこで、万葉の歌人がこの地名を用いて詠んだ、その動機や意図を考えて見ました。

柿本人麻呂が、高市皇子の殯宮(あらきのみや、もがりのみや)の時に作る

持統十年(696年)作の挽歌

「かけまくも ゆゆしきかも 言はまくも あやに畏かしき

明日香の 真神の原に ひさかたの 天つ御門を 畏くも 定めたまひて

(明日香之 真神の原 尔 久堅 能 天都御門 乎 懼 母 定賜 而)

神さぶと 磐いは隠ります やすみしし 我が大君(天武天皇)、、、、」 (巻二-199)

149句に及ぶ最大の挽歌を捧げるのですが、先ず高市皇子の父である天武天皇を神として崇敬する詞から始めます。歌は続いて壬申の乱に触れて、天皇は“関ヶ原の仮宮に天降りして天の下を治めようと軍勢を集め、皇子であるゆえ(高市皇子に)お任せになった”と詠んでいきます。更に、自然の力に譬えた描写で戦を語り、ついに(皇子は)“伊勢の宮から吹く神風によって賊軍を平定なされ、(天皇は)定めていた瑞穂の国を神ながら太敷きますことになり、(皇子が)それをお助けになった”旨、詠み続けます。

歌は、冒頭から、40代天武天皇は“明日香の真神の原に 悠久の朝廷みかどを尊くもお定めになった”と述べるなど、言わば“新天地に朝廷を置かれた”と、詠います。

しかし、先述したように、37代齐明天皇の時代には、中大兄皇子(天智天皇)のもとで、既に「真神の原」は、飛鳥京に変貌しています。天武天皇自身も、皇子(大海人皇子)として都の建設に協力しています。その後、近江大津京に遷都し(38代天智天皇・667年)、5年半後に再びこの地に戻って来たのです。

(天武天皇は、672年・壬申の乱の後「後岡本宮」に入る。翌年、「飛鳥浄御原宮」を隣接して造営。飛鳥寺、橘寺、川原寺は以前と変わらず、他の施設も修復・増設して使用している。)

歌の「真神の原」は、単に、古称(昔の呼び名)を持ち出すことで天武天皇の業績をより大きく見せようとしたものではないと考えました。

人麻呂は、この地は、“神の子として天降あまもりした天皇が、代々絶えることなく継ぎ継ぎに天の下を治めるべき地”(29番歌参考)であるとして、「真神の原」と発したのだと思います。

継いで41代持統天皇が都とした「藤原の地」(藤原京)もまた、儀礼歌を詠む時の人麻呂にとっては、“神が定めた地・真神の原”であったと思います。

(「真神の原」に、狼の口が大きいことから付けた「大口の」と言う枕詞は付けていない。)

舎人娘とねりのおとめが雪の歌一首として 冬雑歌 にある歌

「 大口おほぐちの 真神の原に 降る雪は いたくな降りそ 家もあらなくに 」

(巻八一1636)

(大口の真神原に降る雪よ、ひどくは降らないでおくれ、この辺りに家が在る訳じゃないから) 舎人娘子については、持統上皇の三河行幸に従った時に詠んだ歌があるところから、持統天皇に仕えた女官であったと見られています。(天武天皇の皇子・舎人皇子の歌に、応えた歌もある。)

従い、この歌は、藤原京時代(694年～709年、持統上皇崩御は702年)の作と見えます。藤原京は、その南の端が、飛鳥京の北の端に当たる程の近くに、新しく造営された都です。宮殿が移ったとは言え、飛鳥京の地が荒廃したわけではありません。歌は、“家も無いのだから”と言います。飛鳥寺が建つずっと以前、狼に出会うような野原を想像して、「真神の原」と、詠んでいるように見えます。しかし、飛鳥盆地がこのような原野であった時代は、舎人娘子の時代よりも、120年以上遡らなければなりません。「真神の原」と名付けられてもいない頃です。舎人娘子の歌は、次に挙げる「長歌謡」を受け継いで詠んだものと考えました。

古くから伝わる長歌謡を集めた巻十三の相聞にある歌

「みもろの 神奈備山ゆ との曇り 雨は降り来ぬ 天霧あまぎらひ 風さへ吹きぬ
大口の 真神の原ゆ 思ひつつ 帰りにし人 家に至りきや」 (3268番)

(神奈備山から雲が広がり雨が降り出した。空には霧がかかり風も吹きつける。そんな中 大口の真神の原を通して、思いに耽りながら帰って行ったあの人、もう家に着いたであろうか。) (この「神奈備山」は、飛鳥盆地から見える神が坐す山で、雷丘ともミハ山ともいわれる。)

この歌謡が整えられた年代は明確には分かりませんが、このような抒情的な歌が宮廷の宴で誦謡されるようになるのは、舒明天皇(629年即位)の頃からであろうと思われれます。(天皇自身が詠んだ“鹿の声に物思う”歌1511番などもある。)

先述したように、舒明天皇は、ここに宮を築いた最初の天皇です。ここを都にせんと拓ひらき初めた頃です。飛鳥寺は大寺院になっていますが、当時、「狼が出る真神原」は、まだそれほど遠い昔話ではなかったと思われれます。(舒明天皇の岡本宮は火災

に遭い、田中宮(檀原市)636年へ、百濟宮(桜井市吉備)639年～641年へと、移る。)

歌謡は、「雨風の中を、朝帰りした男を思いやっている」女歌と言われます(伊藤博氏)。「大口の真神の原」が、雨や霧や風に次第に覆われていく情景が、男を案ずる女の心情とよく合っていると思います。

舎人娘子は、この歌謡の詞に感動し、歌の女性の心情に自らの気持ちを重ねた。と同時に、そこに詠われている情景までも、自らの歌に取り入れたものと思います。

舎人娘子が、藤原京の宮廷で、簡潔に短歌にして披露したその「真神の原」とは、“悪天候の中、一人家路を急ぐ人が通る原”であった。そして、心情としては“帰って行く恋人を見送る原”であった、と考えました。

柿本人麻呂も、舎人娘子も、自らの歌で、「実態に即して名付けた地名」であったものを、「意味概念をもつ地名」に変化させたと言えます。

新たな「真神の原」に、“争乱が起ること無く皇位継承がなるように”、“自然の脅威に遭わないように”との、作者それぞれの願いを託したのであらうと思いました。

- 主な参考文献 ・伊藤博 「萬葉集・釋注」 集英社
- ・宇治谷孟「日本書紀」全現代語訳 講談社学術文庫
 - ・坂本、毛利「万葉事始、年表」和泉書院 ・吉川弘文館「日本史年表」
 - ・奈良文化財研究所・飛鳥資料館「飛鳥の宮、飛鳥寺」
 - ・橿原考古学研究所附属博物館「飛鳥の遺跡」

飛鳥京の絵図(南方より見た想像図) 国営飛鳥歴史公園・飛鳥の歴史HPより

